

日本動物看護学会第28 回例会 第29 回動物臨床医学会年次大会と共催(同会場内で実施)

<日時> 2008 年11 月15 日(土) 14:15~15:15

<会場> 大阪市中之島・グランキューブ大阪(大阪国際会議場)

<プログラム> 動物看護事例の発表と意見交換

「お互いの動物看護経験を共有しましょう！」

「そのとき、あなたなら、どんな動物看護を実践しますか？」

<進行> 西谷孝子(広島県・西谷獣医科病院、本学会認定動物看護師)

<発表者> 橋本美穂(広島県・西谷獣医科病院、本学会認定動物看護師)

看護事例の発表:猫の慢性気管支肺炎の看護-ICU用経過観察表を用いた看護を振り返って-

<パネラー> 阿部令子(京都府・アニマルサポートオフィス・ミーチョ代表、本学会認定動物看護師)

崎山法子(奈良県・王寺動物病院・本学会認定動物看護師)

瀬戸晴代(広島県・西谷獣医科病院・本学会認定動物看護師)

富永良子(大阪府・ネオ・ベッツ VR センターJAHA 認定1級VT・本学会認定動物看護師)



11/15 当日の様子

例会は、110 部の資料が足りなくなるくらいの人入りでした。

またその内容は、時間が足りないと思えるくらい濃いものでした。

ひと言で言うならば、『面白い!』という内容でした。(遊座:当日事務局担当談)

例会参加者の感想レポート抜粋です。

第 28 回 例会レポート

丸山祐佳

橋本さんの発表を聞いて入社半年頃の自分を思い出しました。本当に覚えが悪く今回のような詳細なデータ管理にまでとてもしなかつたと思います。データにすることでより正確に動物の変化を把握でき、橋本さんもより看護の注意点などを意識できたのではと思います。また、その後の意見交換では同じ症状でも病院の診療方針や設備の違いなどにより対応が変わってくることを改めて感じました。

崎山さんの、経腸カテーテルの提案などや、富永さんの話された飼い主さんへの手紙についても大変気になりました。私の病院は院長と 2 人でやっており、V T 間での情報の共有をする必要がありません。記録に残す事を心がけなければと思いました。

学会後、早速腎不全で脱水を起こして入院した猫の看護記録をつけ始めました。しかし私はそればかりに集中しすぎ、細かな配慮が出来ずに残酷な看護をしてしまっていました。先生に注意を受け、記録をもう一度見返すまでそのことに気づきませんでした。それぞれにあったベストな看護を行うために、もっと観察し動物が教えてくれるメッセージをしっかり汲み取っていかなくてはと思いました。未だ反省の毎日ですが、学会などの機会で色々な人の意見を聴いてもっと自信のある V T になっていけるように頑張りたいと思います。

第 28 回例会を聴講して

こおりやま動物病院 並木まどか

今回の例会は【それぞれの動物看護観を語り合う】というテーマで、まず、まだ動物病院入社 1 年にも満たない動物看護師の橋本さんが自身の病院で経験した看護事例の発表を行い、その後、動物看護経験が豊富で動物看護学界でもリーダー的立場にあるパネラーの方々から、橋本さんの看護に対するコメント及びご自身ならどのような看護をするか、自身の病院で実際にされていることの紹介などがあった。

橋本さんの演題は「猫の慢性気管支肺炎の看護 ～ICU 経過観察表を用いた看護を振り返って～」である。橋本さんは慢性気管支肺炎で呼吸困難状態にある猫の看護にあたり、看護目標・計画をたて看護を実践し、入院中の栄養管理と自らが考案した ICU 管理表の利用については反省点が残ったが、おおよその目標は達成されたという。

今回の例会に参加させていただいて、橋本さんもそうであるし、パネラーひとりひとりの独自の看護や理念がうかがえ、新しい発見があり、よい機会となった。こんなにも個人、病院によって看護が変わるということは驚きであった。橋本さんに関してはまだ入社 1 年にも満たないとのことで、ICU の管理表を考案するなどの独創性は病院の雰囲気、方針などもあるであろう。私もアイデアを出しやすい職場の雰囲気作りを心掛けていきたいと思う。

私ならどんな看護ができるのか。オリジナリティのある看護を行うには、オーナーとのコミュニケーションやスタッフ間のコミュニケーションからの情報収集は必要であるし、動物の気持ちを感じ取る感性も必要である。また、頭の中の固定観念をなくし、常に新しい、より良い方法はないかと考え続け、できるだけ多くの看護プランをあげること、そしてその一つ一つのメリットとデメリットを考慮しながら計画を立てていくことも大事であると考え。それから、やりっぱなしではなくて症例ごとに後から自分の看護を振り返ることや他の偉大な看護師のみなさんの意見を伺うなど、もっとできることがあることに気がついた。私は今まで学会では他の病院の看護などを聞いて情報を得ることにとどまっていた。これではいけない。自分自身のことも意見してもらおう場にしなければ、と思った。